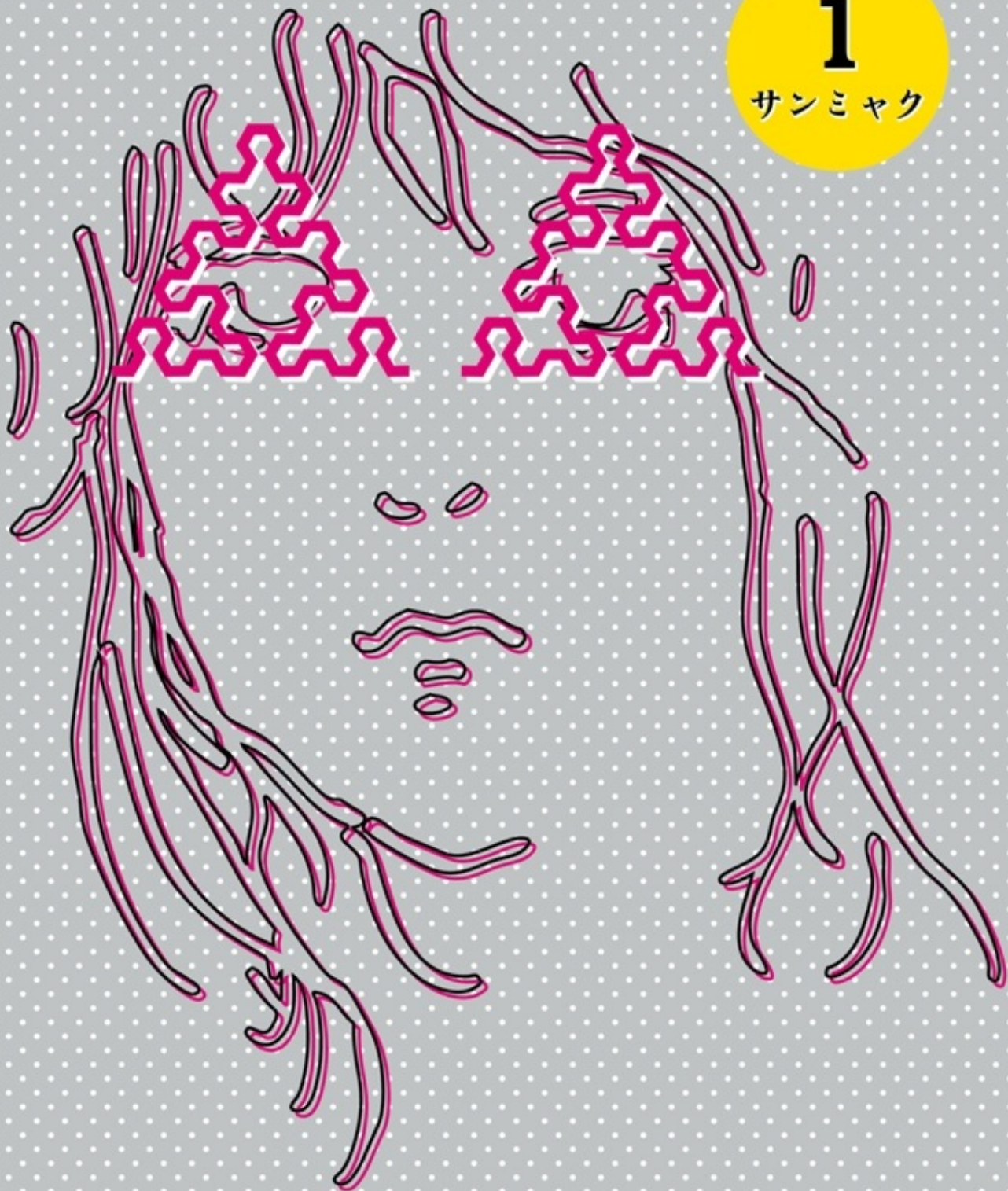


山

脈



1



サンミヤク





もくじ


15分でできる！「これを言えばプリキュア通に見えるコメント」ガイド！ 蜂殴打介

絵で描く3分間ミステリー 賽川ヒフミ  

はじめてのソーシャルワーク 八白青香  

楽しんで小説家になる方法 菅原学  

執筆者募集  

新派文芸賞のお知らせ  

編集後記  

奥付  

既に放送開始から8年が過ぎている『プリキュア』シリーズ。

アニオタ界隈では軽く「見ていて当然だよネー」「ネー」みたいな空気になっていますが、実際のところ全部で約400話+劇場版11本といく膨大なコンテンツとなっており（全部見ようとするとならば200時間を越える分量となります）とてもじゃありませんが、今から全てを押さえるのは中々無謀ではあります。

そこで今回は『プリキュア』シリーズを殆ど見ていなくても、プリキュアオタを「む、コイツわかってるな！」と騙せるような、そんな肝を掴んだコメントを各プリキュアごとにご紹介したいと思います。

これで君もネット上でいきなりプリキュアの話題をふられても大丈夫だ！！

『ふたりはプリキュア』

記念すべきプリキュア第一作。

幼女向けアニメでありながら徒手空拳で本気の殴り合いを繰り広げ、子供に大人気そして大きいお友達
達の度肝を抜いた開祖にして完成型。

「在庫」という不名誉なアダ名がつくまでにオモチャの売れなかった『明日のナージャ』から一転、
大人気番組に。まさに救世主。

略称

「無印」 「初代」

登場プリキュア

キュアブラック/なぎさ

戦闘スタイルは直線的な打撃、口癖は「ありえない」

キュアホワイト/ほのか

戦闘スタイルは合気道な様な相手の力を利用した攻撃、声優は「ゆかな」

決め台詞

ブラック「とっととお家に帰りなさい!」

ホワイト「闇の力のしもべ達よ!」

【通ぶれるコメント】

「なんだかんだで無印が一番かな」

「戦闘シーンの過剰なまでの回転がいいよね」

「一番泣けたのはキリヤかダークドリームだな・・・」

「プリキュアで一番敵にまわしたくないのはホワイト」

『ふたりはプリキュアMax Heart（まっくすはーと）』

前作から新プリキュア（？）が一人増えての2年目。

略称

「MH」

登場プリキュア

シャイニールミナス

正確にはプリキュアではない、なんか光の意志とかなんとか。戦闘能力皆無、バリア一張ったり敵の動きを一時停止させる技が使えるくらい。

【通ぶれるコメント】

「何度考えてもDXにルミナスが出れて満薫（みちかお）が出れないことに納得いかない！」

「映画のブラックvsホワイトは凄かったなあ・・・そら幼女泣くわなw」

『ふたりはプリキュア Splash Star（すぷらっしゅすたー）』

前作からキャラクターを一新・・・とは言ったもののパツと見た感じはそれほど変わっていないような気もする3作目。

無印+MHの肉弾戦は日曜の朝だと胃もたれ必死の為、「光」を多様した柔らかい表現に変わった・・・という触れ込みではあったが、その「光」の表現である大出力のバリアーとビームは全作品内でも最大級の破壊力を持つ。

あと商業的には一番コケた作品。

略称

「SS」

登場プリキュア

キュアブルーム/咲（さき）

黄色い。後半パワーアップしてキュアブライトになり、さらに黄色くなる。百合属性は見た目に反しネコ。

キュアイーグレット/舞（まい）

エロい。後半パワーアップしてキュアウィンディになり、さらにエロくなる。百合属性は見た目に反しタチ。ただしまとめて呼ぶ時は咲舞の順番で。

満（みちる）

正確にはプリキュアではない。敵から寝返って味方に。格好は地味。

薫（かおる）

正確にはプリキュアではない。敵から寝返って味方に。格好は地味。満と薫で満薫（みちかお）と呼ばれたり呼ばれなかったりする。

決め台詞

咲「聖なる泉を汚す者よ!」舞「アコギな真似はお止めなさい!」

【通ぶれるコメント】

「お話はSSが間違いなく最高」

「満薫をDXに出せよ!」

「スペック的には最強プリキュア」

『Yes！プリキュア5』

「SS」でのキャラ変更が失敗した経験から今回はかなりデザインを変更して、さらに人数も5人に増加。

それぞれ能力の異なる5人が有機的に絡み合う「連携」を意識した戦闘シーンは、画面の上下奥行きを強く感じさせる自由自在なアクションとして成功している。ただしそれ故に暴力に歯止めは効かない。

また5人のプリキュア+妖精たちの人間関係も複雑化している。それに加え敵組織が一枚岩では無いため、敵側の人間模様も描かれている。

略称

「5」

登場プリキュア

キュアドリーム/のぞみ

ピンク。口癖は「けて～い！」。バカでドジ。クズ。得意技は洗脳。

キュアルージュ/りん

オレンジ。呼ぶときは「りんちゃんさん」と言うと良い。火を吹く。

キュアレモネード/うらら

黄色。「はじけるレモンの香り（笑）」。基本ザコい。

キュアミント/こまち

緑。バリアが張れる、そしてそのバリアをぶっ放す「ミント砲」という最終兵器を持つ。

キュアアクア/かれん

青。初代ババア。

【通ぶれるコメント】

「ダークドリームには幸せになって欲しかった・・・」

「ブンビーさんなあ・・・」

「みるくうぜえ」

「ガンバランスの引継ぎには本気で感動した」

『Yes!プリキュア5GoGo!』

「5」が好評だったため、キャラクター引継ぎでの2年目。

しかし商業的には奮わず、これ以降プリキュアには「1年で必ず終わる」という制約がつくことになる。

略称

「GoGo」

登場プリキュア

ミルキィローズ/みるく

前作では妖精だったミルクが人型になり変身、ただし正確には「プリキュア」では無い。全プリキュア中、腕力がもっとも強い（しかも他プリキュアと比べて「圧倒的に」レベルで）。ウザい。

【通ぶれるコメント】

「みるくうぜええええええ！！」

「ブンビーさんにはマジで泣いた」

『フレッシュプリキュア』

いきなり等身が上がったプリキュア。全作の中でもっとも「熱血度」の高い作品。

また本作ははじめて市井の人にも「プリキュア」という存在が認知されている為、妙にしがらみの強さに引っ張られる人々が多いのも特徴。

略称

「フレッシュ」「フレプリ」

登場プリキュア

キュアピーチ/ラブ

漢。羅武（らぶ）と表されることも多々ある。そのあまりの漢らしさから「敵を殴ったら死んだけど改心してプリキュアにさせた」という今時ジャンプでもの中々やらない展開を巻き起こす。

キュアパイン/ブッキー

ブッキーのオタ受けは異常。ただし「アナルにフィストファックからのスカトロプレイ」という必殺技を持つので、その手の趣味が無いなら避けたほうが無難。動物としゃべれる。口癖は「私信じてる！」便利なので良くプリキュアネタでは使われる。

キュアベリー/ババア

プリキュアのババア・オブ・ババア。ソードは囧。

キュアパッション/イース/せつな

「殴られたら死んだけど改心してプリキュアになった」人。なんかテレポートとかする。ラブと同棲して百合好きを歓喜させた。

【通ぶれるコメント】

「さすが羅武wwwwww」

「キュアババアwwwwww」

「キリヤ、満薫、ブンビーときて、ここでようやくイース/パッションという結果に俺は涙を禁じえない」

「一番好きなのは・・・西さんかなww」

『ハートキャッチプリキュア』

全プリキュア中「もっとも無茶苦茶をやった」プリキュアとして歴史に名を刻んだ。それでありながら「プリキュア」という存在を再構築し、そこに隠れていた欺瞞を暴きだした。また主要人物の父親が作中で死ぬ、という日曜朝には重い話を捻じ込んできた問題作であり、意欲作。

略称

「ハトプリ」

登場プリキュア

キュアブロサツム/つぼみ

口癖は「堪忍袋の緒が切れました!」。放送開始時には「史上最弱のプリキュア」とも呼ばれていたが、最後にはガンバスターサイズになり「相手が無限に死に続ける」パンチを放つなどチートもここまでくれば立派である。

キュアマリン/えりか

かわいい、ウザかわいい、超かわいい。歴代プリキュアの中で倫理観がもっとも薄く、私利私欲の為にプリキュアに変身することもある破天荒ぶりで物語を引っ張った。でもかわいい、とにかくかわいい。

キュアサンシャイン/いつき

男装してた人。元々格闘技を学んでいたこともあり、変身後の戦闘力はかなり高い。変身バンクの作画枚数は7500とも8000とも言われておりその気合の入りようは、次回予告でそのシーンが流れただけで本編そっちのけになった程。ブラコン。

キュアムーンライト/ゆり

まさかの高校生プリキュア。「えープリキュアー?!」「プリキュアが許されるのは中学生までだよねー!」「キャハハーババーア☆」と言われかねないポジションであったが、前作のキュアベリーがババア過ぎた為に奇跡の回避。元プリキュアであったが彼氏(妖精)が死んでおり後半まで変身能力を失っている。また作中で父親が死ぬ。重すぎる。

【通ぶれるコメント】

「えりかかわいい」「結局プリキュアでは本質的な問題を解決できない、って話に真正面から挑んだのは凄い」「えりかうざかわいい」「ゆりさんの話が重いのは、高校生って設定ならこれくらい受け止めれると思ったからなのかな」「えりか超かわいい」「無限シルエットってwww」「えりかマジ

かわいい」「えりかかわいい」

『スイートプリキュア』

現在放送中のプリキュア。歴代精霊の中では今作のハミィが一番まとも（というか今までのがぶっ飛びすぎだ）。等身は「フレッシュ」とほぼ同じ。

敵と味方の境界線が曖昧な登場人物が多く、深い善悪の問題が描かれる・・・かと思いきやコウモリ的な中途半端感だけが残ってしまう、けど最終話までには何とかしてくれるって「私信じてる！」

略称

「スイプリ」

登場プリキュア

キュアリズム/響

声優小清水が「ぜったい許さない！」と叫ぶ自虐ネタももう飽きられつつある。和音（わおん）という雌犬を飼っている。

キュアメロディ/奏

最近は1話中2-3言しか喋っていないんじゃないのか・・・？

キュアビート/エレン

元敵で元猫。変身後はアホ毛を弾くとエレキギターの音が出るようになる。

キュアミューズ/アコ

初の小学生プリキュア。やっぱり小学生は最高だぜ！しかし彼氏持ちなので全国のロリコンは泣いた。

【通ぶれるコメント】

「ミューズは全身タイツの方がエロかったよな」

「エレンは最初、猫の属性を引きずってたから人間のリアクションとしては変な部分がある」

「キュアナージャ」

そもそも『プリキュア』の魅力とはなんなのか？

8年も続いている作品ですので、物語キャラクター作画等々見るべき、語るべきものは非常に多くあります。

なので私が『プリキュア』シリーズを通して「そこだ！そこに震えるんだ！」という部分を特にご説明します。

プリキュアの主人公は、その殆どが年端もいかない少女達です。

地球の平和を守る義務を、街の幸せを守る義務を、人の心を守る義務を、彼女達が背負う必要は本来一つもありません。

それでも彼女達は自分の命をかけて、その重すぎる責務を抱え戦うのです。

それは何故でしょうか？

彼女達が戦う力を得たのは一プリキュアになったのは、「偶然」によるものです。

たまたまそこにいたから、たまたま知り合いだったから、たまたま見つけたから・・・彼女達はその「偶然」に翻弄され、否応なしに血みどろの戦いの渦に放り込まれます。

そんな理不尽に対して、彼女達は「目の前の誰か」をただ助ける為だけに立ち向かいます。

そこには「善」であろうとする強固な意志はありません、恐れを押さえつける決意もありません。

それでも彼女達が立ち向かえるのは、「少女」という長い長い女の一生の中で一瞬だけ輝く『無垢な正義』があるからです。

「少女」であるがゆえに、何も考えず伸ばしたその手は「誰かを救う」のです。

(そしてそこが「魔法少女モノ」の血脈を受け継いでいる、あるいは「己の意思で正義となる/なろうとする」仮面ライダーの系譜との一番の差だと思っています)

ただ、その『無垢な正義』にも限界はあります。

無垢だからこそ、その一挙手一投足が『正義』である代わりに、僅かな迷いで砕けてしまう儂いものなのです。

そしてそこを乗り越えるのが、彼女達の「決意と気付き」です。

血ヘドを吐き、骨を砕かれ、それでも立ち向かう事を決意した時、彼女達は自分達が今立ち上がったのはプリキュアの力では無い」ことに気がつきます。

言い換えましょう。

彼女達が今まで戦ってこれたのは、偶然によってプリキュアの力が与えられたからに過ぎません、そ

それはたまたまプリキュアになった私」が戦っているだけです。

しかしそのプリキュアの力が砕かれ倒れた時、それでも彼女を立ち上がらせるのは「プリキュアではない力」・・・それはつまり「彼女が本来持っている力」なのです。

そう！この瞬間！

彼女は「プリキュアに使役される者」から「プリキュアを使役する者」に生まれ変わるのです！

たまたまプリキュアになった少女から、プリキュアを凌駕する力を持った少女への羽化！

「プリキュアになる『偶然』」から「プリキュアになる『運命』」への！

デュアルオーロラウェーブでありルミナスシャイニングストリームでありデュアルスピリチュアルパワーでありプリキュアメタモルフォーゼでありスカイローズトランスレイトでありチェンジプリキュアビートアップでありプリキュアオープンマイハートでありレッツプレイプリキュアモジュレーションなのです！！（あ、これ全部変身の掛け声ね）

・・・えー、とにかく

少女に降りかかった『偶然』が、少女の力によって『運命』に変わる瞬間に、超弩級のカタルシスを感じて痺れるのです！

その点が私の『プリキュア』をずっと見続けている、一番のポイントなのです。

絵で描く3分間 ミステリー

賽川ヒフミ (solwood apart)

ミステリー初心者の方には
ミステリーを読む愉しみを
ミステリー上級者の方には
ミステリーの新たな発見を



なにもものにも原点(原典)があり、現在まで続いているからには原因がある。

探偵小説にも1841年米国にルーツがある。雑誌「グレアム」に掲載された掌編「モルグ街の殺人」。史上初の推理小説とされる血腥いこの作品は、ボストン出身の詩人であり批評家、

雑誌編集者で作家でもあるという同人作家の鑑、エドガー・アラン・ポーと言う男が書いたものだ。

あなたの目の前のパソコンで一丁ネットで画像検索を試みれば、胃腸でも悪いのか、腹の辺りに手をやる胡散臭い風体をした彼の姿が表示される筈である。普通ハイポーズで腹を弄るだろうか。考え難い事だ。

もしかすると彼は密やかに腹痛持ちの偉人でも崇拜していたのかもしれない。今となつては立証は不可能である。ミステリーという分野ではやはり、まず事件が巻き起こらなければならぬ。それはセンサーシヨナルなほど良い。

そして雁字に絡まった謎を紐解く探偵(役)に登場願う。彼、彼女は論理に基づいた推理の果て、現実に背かず非現実のフチを漫ろ歩くような結論へ、演繹的に帰納させなければならぬ(ミステリーファンはこの、

「演繹的」「帰納」という言葉が大好物である)。要は一般的に納得できるもつともな結論を出さねば成立しない。その連綿と170年に渡るヒナ型を作り上げたのがモルグ街の殺人であった。しかしその源流はさらに遡る。

ピカレスクやホラー、ジュブナイル、叙事詩からもその変遷を追うことができるだろう。ただし知識が全く無いので、今回では触れなくておく。変遷と言う面では、過去から現代においても顕著である。

事件が起こる、探偵(役)が解く、とどのつまりこれさえ守っておけば、万人の前で「これは探偵小説だ!」と胸を張るのであるが、それ以外の部分、舞台装置や時代考証など小説としての骨子は、

読む人間に不自然無く受け入れられるものとして描かれなければならない。

ミステリーは極まった現実に支配されている。

時の流れと共に殺人に対する印象も殺害方法も、探偵、警察、それらの在り方すらも変容していつて、おんなじように描写していたのでは錯誤が生じる。読者は事件を事件と思わない。

ありえない世界観で語られる殺人事件、的を外していると思えない論拠。それは最早ファンタジーと呼ばれるものだろう。現実的でない事件を扱う一方、その実ミステリーは古今問わず、時代を反映した極めて現実的な読み物なのである。

近代、ミステリーは大変大衆的になる。

上で述べた「一般的に納得できるもつともな結論」に帰結させるにあたり、いかに筋道を捻じ曲げ曲解させ、強引な手管を駆使し読者を驚かせるか、その手法にばかり重きを置いた作品が乱立している。

と言うのも、ありとあらゆるトリックや展開は出尽くしてしまった感が否めない。

時代が変われば装置的な向上は疑いないが、使用されるのが糸か電波か、刃物かレーザーか、南京錠かオートロックか等という様に、使途が根本的に換わるものではないからだ。展開や設定の奇抜さで差別化を図るほか無い。

また、叙述トリックの流行が、言わばメタ視点での読み方を奨励している。

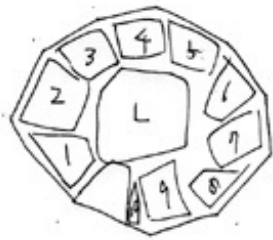
読者と作者間での騙し合いに過ぎない叙述トリックは、ミステリーを推理ゲーム化し、張詰めた緊張感を伴ったリアリティを感じ辛くさせているのではないか。読後に思うのは、納得の上の衝撃では無く、盤上における勝敗の悲喜だ。

一丁ネットで好きなミステリーを検索してみれば、関連語句に「(書名) 犯人」と出てきてしまうこのご時世。畏怖を漂わせたリアルな延長から、作者との知的な推理ゲーム。ミステリーはその様なものへと変わりつつある。

今回はそんなミステリーの世界へ、イラストの橋架けご案内いたします。

ミステリー好きは 一つ所に果しちゃ駄目。

十角館の殺人 綾辻行人

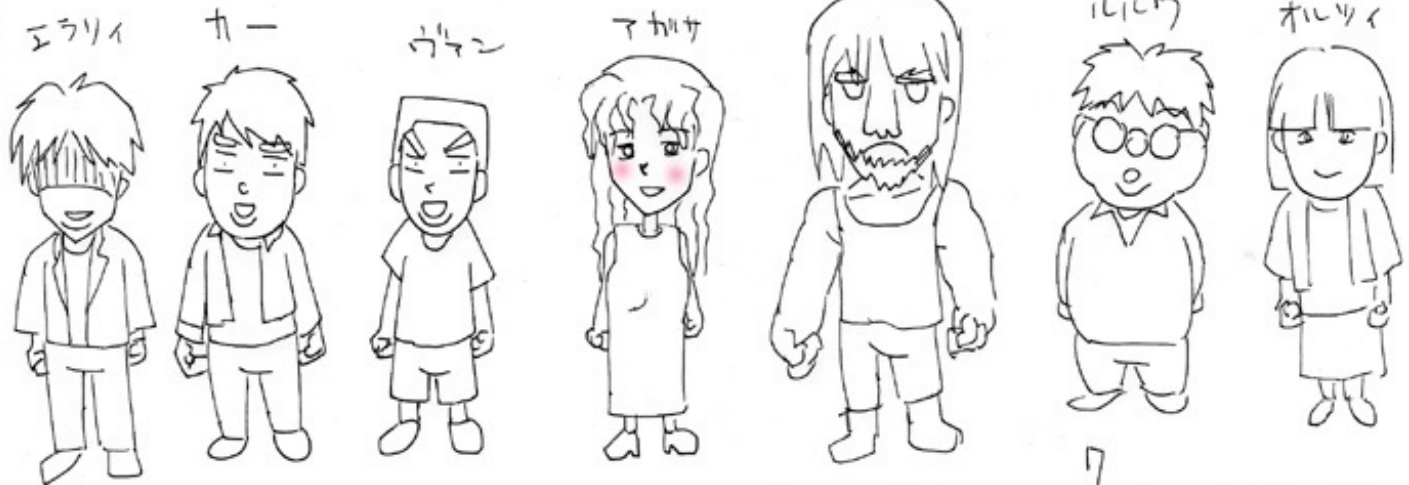


孤島

孤島十角館

孤島に仰む十角館

で巻き起る血の惨劇!



大学のミステリー研究会に所属する6人の若者
皆著名なミステリー作家の名も名乗る少しはもっている

こういう孤立無縁ハワートに多いが、恋が盛り上がると死ぬ 本作は?

十角館の殺人 著 綾辻行人

1987年9月5日 講談社ノベルズ刊

綾辻行人のデビュー作。この作品を期に、

綾辻以降と言う言葉が生まれたほどの傑作。

某大学の推理研究会の6人は、十角館と

呼ばれる屋敷が睥睨する孤島を訪れる。

かつて凄惨な殺人事件の舞台となった

この地で、一時の不謹慎なスリルを

味わおうと言うのだが……。

ミステリーを呼んだことが無い人に私がまず

お勧めするのがこの一作。取っ付き易く、

ページを捲らせる力に溢れた文章。

ドラマのような急転直下のストーリー。

ラストの衝撃はこれぞミステリーの醍醐味!

インシテミル

病気の?ってらしい人物描写の言葉尻に美男から

中性的な美形、今死んだらどうイケメン?

どちらかと言えば サスペンス

イケメン、イケメン、少し金

我らイケメン5兄弟!!



インシテミル 著 米澤穂信

2007年8月 文春文庫刊

クローズドサークルものが好きなので、十角館とこちらを。
暗鬼館と言う多くの不可解なルールを内包する空間に集まった、
全く面識のない男女12名。その目的は、監視つきではあるが、
七日間隔離生活をするだけで時給11万2000円を得られる
破格のアルバイトをする為だった。

このルールというのがもう殺人事件よ起これってな御膳たて。
全てを開き直ってみてください。幸せになれます。

あと、今よくよく読んでみたらイケメン二人しかいなかった。
私の読解力の無さで作者様、読者様、関係各所様にご迷惑を
お掛けいたしました。

まあなんというかラストは数学的にすごい。
電卓を片手にご覧ください。

怪異ミステリーの傑作!

首無しの如き

崇るもの

三津田信三

今一番好きな作家

話のキーンと家系田
覚えるまでには読み終わる。

舞台 奥多摩の地 媛首村の山



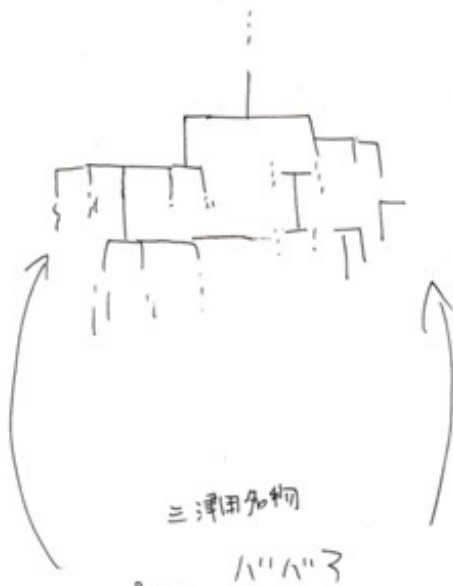
旧き因習に
又ーん 呪み
又ーん、又ーん...
(まじみい)
フー ト ニー ト 又ート



ニート
※作家です

刀城言耶
コレ
東城雅哉

東MAX 逆



首無しの如き崇るもの

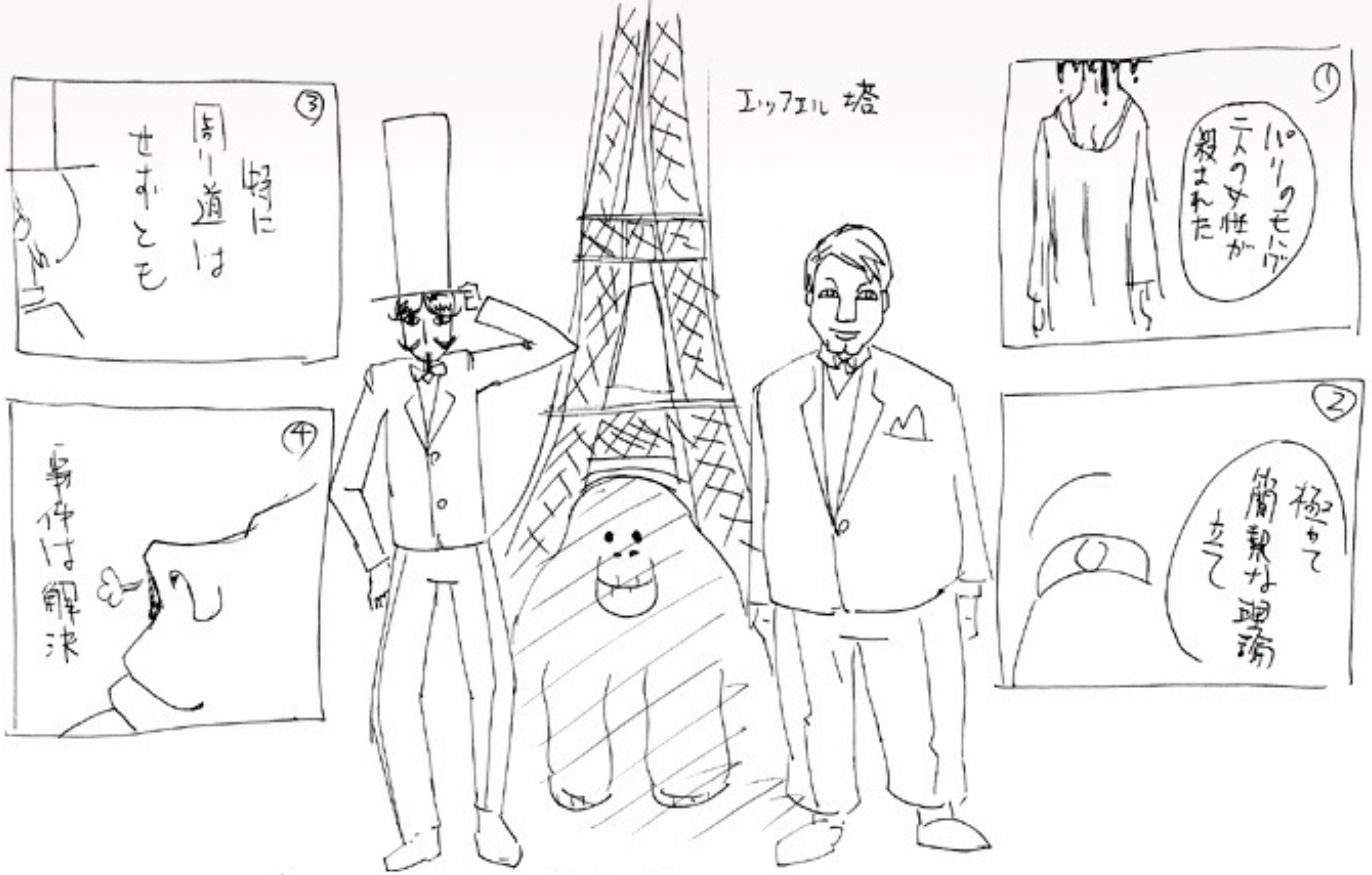
著 三津田信三

2007年5月 講談社刊

まあこの作者の文体は回りくどくて旧字体は出てくるわ難読漢字のオンパレードで、初めはストーリーを追うところではないが、この作品は比較的読みやすく、また水準においても比類なき傑作だろう。媛首山の惨劇という作中作品を中心に物語は進む。ホラーとミステリーの融合、一言でいうとそれだ。しかし現実と幻想のそぞろ歩きは破綻の条理を感うことなく、全くの理知へと導くのである。雅なる饗宴を味わいたい方には三津田信三をお勧めします。

モルグ街の殺人

エドガー・アラン・ポー



史上初の推理小説 リスバクトは本である。

モルグ街の殺人

エドガー・アラン・ポー著

1841年 グレアムズマガジン掲載

最古にして至高。

一切の無駄の無い、教科書と言うよりは問題集のような趣である。

現在のミステリーのルールはいわばこの作品によりもたらされ、そして全てのミステリーはこの作品の二番煎じに過ぎないのである。

それ故、オリジナルだからこそ許される裏技も盛り込まれている。情報の明文化などはミステリー

においては作者と読者の共同声明みたいなもので、そのお約束が守られていない作品など推理の

余地もなく書店に並ぶことも有り得ない。

さすがにオリジナルは違う。

サイドからのオーバラップたるや予想の斜め上だ。これはもう、あなたの目で確かめていただきたい。

ミステリーは以下に示す、ポー自身の言葉に集約、帰結される。

「例えばモルグ街の殺人ですが、いったいこの中で絡み合った糸を解きほぐす手つきのどこに巧妙さがあるでしょうか……」

この糸は明白に、解きほぐされることを意識して組み合わされているというのに？」

おい聞いているか M・S! U・S!

は じ め て の ソーシャルワーク

みなさんこんにちは！ 八白青香です！ 今年30になった記念に、

今まで興味はあったけどほんのちょっと踏み出すことに臆病になっ
ていた「そーしゃるねっと」ってものをやってみました！

今回はその経緯と結果、展望を書いてみるっていう二番煎じ
もいとこの記事だよ！

ちなみに青香は家から出られない病に罹って

13年になるんだよ！ そこを鑑みてよんでね！

日本のソーシャルネットって言ったらずこれがい思い浮かんだ。今でこそ外国勢に押されて会員数激減だの方向性を失って迷走しているだの散々に言われているけど一時期の勢いはすごかった。青香の周りでもみんなやってたよ。

このミクシィ、入会するには誰かの紹介がいる。青香には友達が一人も居ないので（S学生の時はいたけどみんな死んじゃった！青香以外のクラスメイトで集まっていた居酒屋さんで火事があった！）、某巨大掲示板の紹介板から招待してもらって、無事入会。操作方法を覚えるためにいろいろと弄っていると、メールが一通届いた。

「友達になってください（ハート）」す、すごい！リアルで友達ができなかった青香に、開始してものの3分で友達ができちゃったよ！予想以上にすごいかもしれない、ソーシャルネットって。

友達になってくれたのは、ももさん（仮名）。「素敵なマイミクさんです☆☆☆」なんて、紹介文まで付けてくれた！世の中って簡単なんだなあ。すぐ会いいたいって言うから、家の住所を教えといた！今度遊びに来てくれると思うよ！

さて、友達があれよという間に5人出来たところでミクシィの機能を色々つかってみた。ミクシィには同じ趣味の人たちがばかみたいが集まって会話を楽しむ、素敵なコミュニティっていうものがある。早速私の趣味を検索してみたよ！

「蟻の巣を水没させる」……0件 あれ？ おかしいなあ……。ちょっと限定的過ぎたかな？「蟻の巣を根絶やし」……0件。「蟻の巣」……3件、ようやく出た。でも何だか思ってたのと違うナ。「壁際の蟻の巣を眺めま部」というコミュの説明文を読むと、「水責めしちらめえ」……。

求めているのと真逆の活動内容だ。まあ敵だね。とりあえず知り合いのハッカーにパソコンを両断してくれるように頼んだから、ごめんね！

とりあえずミクシィをやったってわかったこと。友達が16分で8人できる！すごい！フューチャーアイコンって感じ！

2 ツイッター

ネットサーファーの青香は勢いをそのままにツイッターに進攻したよ！

ツイッターは紹介者がいらなからすぐに入れました。青香しってるよ。「なう」って付けばいいんだよねなう（笑）

その日あったことをポチポチつぶやく。初めは何を書いていいか分からなかったけど、青香もミクシィに揉まれて慣れたもの、一日に100ツイットもしちゃったなう。

てへべろ。あと、フォローっていうものがあって、他の人の呟きを聞きたいときに「フォロー」すると、自動的に自分の「タイムライン」にその人の呟きが表示されるんだよ！

うーん一体感！ 自分がフォローされるとその人が「フォロー」になる。

フォローよりフォローが多い人ほど偉くてカースト上位で、ツイート権を統括できるエリートツイッターなんだって誰か言ってた、「拡散希望」とか言ってる。ツイッターは難しいなあ。

なんていうかミクシィは目新しい風呂敷を次々と広げて煙に巻いてる感じ、ツイッターは自治が沸く閉鎖的な空間をお洒落なイメージにかこつけ無理くりアドバタイジングして流行らせてるみたいなイメージかな。

あつ、ネットで得た知識振りまいちゃったなう！

ツイッター始めて一週間経つけど、青香のフォローは20人になりました！ それも投資家や起業アドバイザー、さらに外国人！ そうそうたるメンツ！ けど何か最近ツイッターの調子悪いんですけど！

フォローしても5分で取り消される！ 早く直してください、会社の人！ 青香は怒ってますよなう！

青香はただいまフェイスブックに挑戦しようか悩んでます。だってフェイスブックって本名本顔が原則でしょ？ 青香の顔見たらみんな、青香のこと嫌われないか心配なんだあ……。

この続きは、また今度。青香の勇気が出てきたらレポートするね！ ではでは。



肉
面像

「楽をする為の努力は惜しまない」という言葉があるが、それは楽をするにも苦労があり、それなりの道のりがあるということだ。

小説を書こうとした事がある人ならわかると思うが、小説を書くということはかなり困難な作業である。

あなたはどのようにして小説家になりたいのだろうか。人それぞれの理由があるだろう。

大切なのは目標をもって行動し、できればその目標を達成することだ。その過程にこだわる必要はない。

ヘレンケラーも「頂上へは楽な道などない」と言ったあと「それなら自分なりにジグザグに登ればいい」と付け加えている。

小説家になる道のりというのも一つではなく、様々なメディア媒体が普及した今は頂上も一つではなくなった。

この記事では、楽をして小説家になる方法を紹介し、たくさんある中の一つの道筋と、いくつかの頂上を提示する。

一章では、まず目標である「小説家」というものが、どのようなものなのかを説明していく。

どのようなタイプがあり、どこを目指すべきなのか、光を当てていこう。

次の二章では、一章で示した定義を使い、あなたが小説家としてランクアップできる一つの方法を紹介する。

最後の章である三章では、あなたがこれから書く小説をどう人に読ませるかというテクニックを教えていく。

最後まで読めば、あなたは「これなら小説家になるかもしれない」という実感を掴むことだろう。

確かに小説には古くからの歴史があり、偉人がいて、名作がある為、小説家になるのは困難だ。

しかし、現代に生きる我々がその伝統に対してクソ真面目に付き合っただけやる必要はない。

どうか肩の力を抜いて読み進めていってほしい。

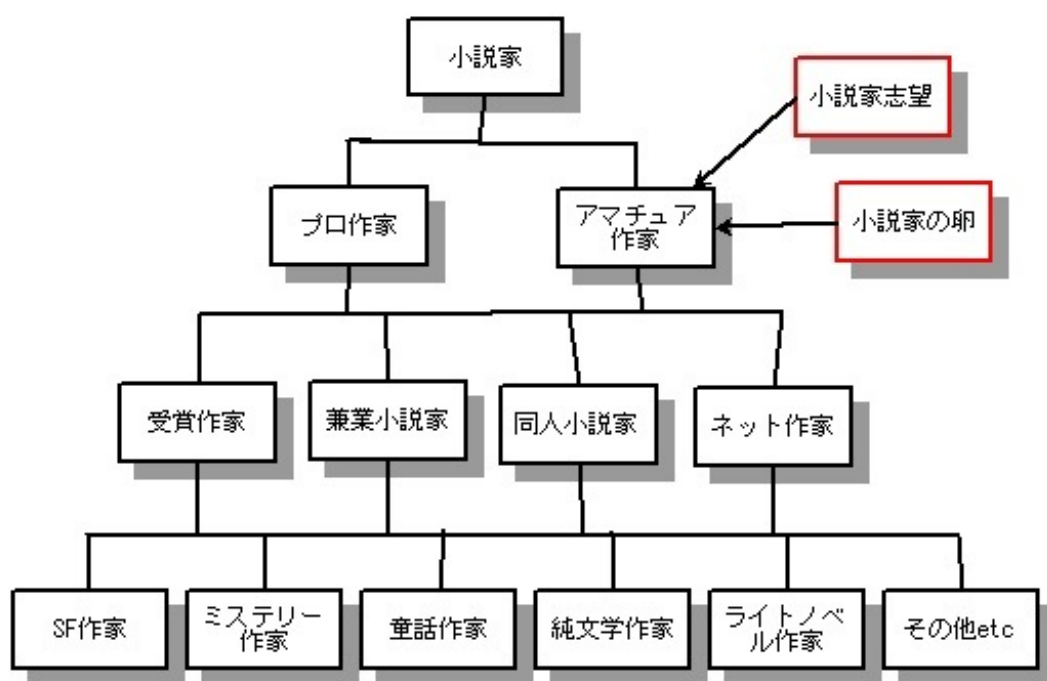
一章 小説家ってそもそもなんだろう

まどろこしいかもしれないがまずは本書における小説家の定義から話していきたい。何故なら小説家には資格や証明といったものがない。だから小説家という定義が曖昧なことが多い。

もちろん、辞書を引けば「小説を書くことを職業としている人」とある。

しかし、インターネットや同人誌などマーケットが他分野に広がった現代では様々なタイプの作家が存在しているし、「アマチュア小説家」や「プロの小説家」といった表現があるからには、小説家の「家」が「職業」から離れ、収集家や、愛妻家といったパーソナリティーに属した「家」に転じてきているといえるだろう。

現在では様々が小説家が存在していて、そのいくつかは非常に簡単になることができるし、またはもう実際になってる人もいるだろう。ざっと分類を図にしてみた。



(慣れないソフトウェアで急ぎで作った為、線が乱れていて申し訳ない)

このように、まず大きな「小説家」というカテゴリーがあり、その下に「プロ」と「アマチュア」が存在していて、さらに職業形態として、「兼業」「同人」「ネット」と並んでいる。「受賞」は形態というより称号みたいなものなので厳密に言えば別のカテゴリーなのだけど、同じように機能する為此こに入れてある。

生物の分類でいえば、「小説目/アマチュア科/同人属/SF種」となるわけだ。

この小説家の下にある「プロ作家」と「アマチュア作家」の違いというものは、小説で飯が食えているかないかという括りになる。そして、その下にある「科」以降はプロアマ関わらずにどちらにも適応される。

宮沢賢治は「小説目/アマチュア科/兼業属/童話種」

たとえば宮沢賢治を例にして当てはめてみよう。現在では全16巻に及ぶ宮沢賢治全集なるものが発売されているが、生前のうちに発表された本は詩集の『春の修羅』と、童話集の『注文の多い料理店』だけである。

その上、資料によれば彼が原稿料としてもらったお金は5円だけであったといわれていて、いくら現代とは物価が違うといえど、これだけで飯が食えていたとは思えない。つまりアマチュアに分類される。また宮沢賢治は農業校の教師を務めていたので兼業作家ということになる。

今では教科書に必ず乗るような超有名小説家ではあるが作家分類でいうと「小説目/アマチュア科/兼業属/童話種」になってしまうわけだ。

結局のところ、宮沢賢治は生きていた間にクオリティの高いの作品を作る小説家としては大成していたのかもしれないけど、小説家としての地位としてはまったく大成しなかった。

先にも書いたが、辞書によれば小説家の定義は「小説を書くことを職業としてること」であるから、宮沢賢治はここから逸脱していることになる。

というわけで長々と書いてきたが、この記事での小説家の定義は「小説を書いている人」ということになっている。

「小説家」＝「小説を書いている人」

夢のない話になるが、現在小説だけを生業として食べていける作家というのはごくごく一部だとされている

だからプロ作家というのはよく名前をみるような有名作家だけであり、あとの大半はアマチュア作家ということになる。

そのプロ作家でさえ兼業作家であったり、同人作家であったりする場合もあるし、またなんらかの文芸賞を受賞しても食っていけずにアマチュア作家の場合もある。

また当然のようにアマチュアがプロになることもあるし、プロがアマチュアに転落することもあるわけだ。

図では「プロ」と「アマチュア」に分けたものの、境目はほとんど曖昧であり、あとの分類は関係なく付随されることになっている。

かのように、プロ作家とアマチュア作家の境界線は曖昧なものとなっている。

おそらくプロとアマの中で一番違うものは、はじっこに赤い枠で囲ってある「小説家志望」と「小説家の卵」の要素だろう。この二つは、アマチュア作家でしかありえないものだ。

そして、この赤枠から脱することができれば、境界線の曖昧さを利用し、胸をはって「我は小説家なり」と宣言することが可能になる。

二章 受賞作家のススめ

一章でプロの小説家だけが小説家ではないことを書いた。

宮沢賢治のことを考えてみれば、小説さえ書いていれば小説家と名乗って問題ないわけだ。

だが、それだけでは心細い。

世間一般では「小説家を目指してるんだ」とか「小説を書いてるんだ」といった時の相手の反応というのは、はっきりいってあまりよくない。

小説家のイメージの中には「知的」で「崇高」なイメージがあるけれど、他にも太宰治のように自殺志願者のイメージがあるし、最近だとバスを襲った通り魔なんかも小説家志望だった。古くたどれば津山三十人殺しの犯人もそうだ。精神病の類がついてまわる。

しかし、これを「実は小説家を目指していて、この前、雑誌に投稿したんだけど、掲載されて賞まで取ったんだよ！」といったら、どうだろうか。

たぶん、ただ「目指してるんだ」というよりはるかに反応はいいだろう。尊敬され評価を受けることもあるだろう。クリエイティブな職種に就くのならば、履歴書の趣味・特技の欄に実績として「小説書き ○○賞受賞」と書くこともできるし、後々自費出版や、電子出版をする時に肩書きとして書くこともできる。

最初に小説家には資格などないといったが、実はこの「受賞」というのは資格と同じような効果がある。

出版会社が新人を売り出す時も、ただの無名の新人として売り出すより、受賞作家として売り出した方が売れるから文芸賞というものは、いくつも存在しているのである。

受賞は他人からの絶対的な評価であり、作家活動というわかりにくい趣味での確実な実績となる。あるかないかでは、雲泥の差がある。

これを読んでもあなたは「そりゃそうだろうけど、賞なんてそんな簡単にとれるもんじゃないだろう」と思いだろう。

ところが簡単に取れる賞がある。

下にあるのがそれである。

第一回 新脈文芸賞 原稿募集

公募要項

賞品：なし

締切：2月14日（バレンタインデー）

発表：3月発刊予定の『山脈Vol.2』にて

- 1.応募原稿は完結しているものに限る
- 2.文字数制限はとくになし。
- 3.ジャンル制限もなし
- 4.タイトルとペンネームを記載してtxt形式で送ること。

送り先：yes_ks@yahoo.co.jpまで

メールのタイトルは「**新派文芸賞応募作品**」をお願いします。

作品を受けとり次第、確認として3日以内に返信します。

返信がない場合はお手数ですが、もう一度メールしてみてください。

見ての通り当雑誌『山脈』が主催している文学賞である。

これは「この賞に応募した作品には無条件で賞をあげる」という企画である。

他の小説の書き方の本や、商業雑誌ではまずできない読者へのプレゼントだ。

「賞は実力でとらないと意味がない」と思う人もいるだろうけど、

あまり難しく考えず、この賞を「よく書き上げましたで賞」だとでも思ってほしい。

おもしろい、おもしろくないに関わらず小説を一本書き上げるということはかなりハードなことだ。

しかも、書いたからって、人がちゃんと読んでくれたりするとは限らない。

山脈に応募してくれれば、とりあえず数人の編集者が読むし、何より「新派文芸賞」という名の「よく書き上げましたで賞」という評価がもれなくついてくる。

書き上げた小説を個人的に発表する時も「新派文芸賞受賞作品」と書いておけば、何もないものよりかは、読まれる可能性はあがるだろう。

それにあなたが「電子出版の雑誌に小説を投稿して賞をもらった」という行動においては、なに一つ嘘はない。

というわけで、山脈では君の書いた小説を待っている！

次の章では、いよいよ、「書き方について」を紹介する。

3章 読まれる文学の書き方

この章では小説の書き方を紹介する。といっても物語の組立方とか、登場人物の作り方とかを紹介するわけではない。

そういった情報はすでにインターネットに溢れかえっているので、ここでやる必要がないからだ。じゃあ、なにを紹介するのかというと、最後まで読んでもらえるような「書き出し」の書き方である。

作品の顔である書き出しに力を入れるのは、基本中の基本ではあるが、おもしろい書き出しを書くというのはかなりのテクニックが必要になる。

実際、はじめて小説を書く人は最初の一行でつまずいてしまうのではないだろうか。

作品の第一印象を決める大事な部分をいきなり書かなくてはいけないのだから無理もない話だ。

そんな人に勧めるのが、「ミゲル・デ・セルバンテス式」である。

「ミゲル・デ・セルバンテス式」とはなにか

ミゲル・デ・セルバンテスというのは言わずもがな『ドンキホーテ』の作者の名前である。

この名前なら誰でも知っているであろう大古典作品『ドンキホーテ』という作品は1605年に書かれたとても古いものなのだが優れた多くのテクニックを使っている。

そのテクニックの一つが「クソながったらしい偉そうかつ卑屈な文章で他人の作品を引用しまくってる序文」である。

この「クソながったらしい偉そうかつ卑屈な文章で他人の作品を引用しまくってる序文」という文章にはもちろん悪意がこもってる。それは私がこの作品をあまり好きではないからだ。

しかしながら、私の好みに関係なく『ドンキホーテ』は世界的に有名な作品であり、過去から現代まで評価されつづけた名作に違いなく、この先もずっと愛され続ける小説に間違いなく非常に優れた小説だ。

今から400年も前に書かれたこの素晴らしい序文には、今でも十分に通用されるテクニック法が語られている。

「たとえいかに荒唐無稽な通俗本であっても、アリストテレスやプラトンをはじめとする一群の哲学者の格言でもって飾りたてられているものだから、読者はすっかり感心して、それらの本の著者連を、学問のある、博識な名文豪と思い込んでしまうというわけさ」

- 岩波文庫 セルバンテス作 ドン・キホーテ前篇（一） 牛島信明訳 から引用 -

『ドン・キホーテ』という作品をわかりやすく伝える為に、舞台を日本に置きかえて説明すると「宮本武蔵好きのおじいちゃんが時代劇小説や歴史本を読んでいるうちに自分を宮本武蔵と思い込んでしまい、侍のコスプレをして馬にのりこみ、日本刀を振りまわしながら全国を練り歩く」といった話だ。本編はスペインを舞台とした物語なので、侍ではなく騎士になっている。

時代によって「滑稽本」とか「風刺本」とか様々な評価されていて、実際、読んでみると濃厚な文学というよりかは、いわゆる時代劇もののパロディといった感触が強い。

この序文は当時に人気があった書物や、それを安易にもてはやす読者に対する揶揄だが、この発言とは裏腹に、この後数ページにわたって哲学者の格言などによって飾りたてる展開になる。

セルバンテスは「哲学者の言葉で飾り立て、自分を学問のある博識な名文豪だと読者に思い込ますテクニック」を一旦批判した後で、自分の作品を哲学者の言葉で飾り立て、自分を学問のある博識な名文豪だと読者に思い込ましたわけだ。

筆者の体験になるが、ドンキホーテをおもしろいと評した知り合いに対し「この本のどこがおもしろいのだ。こんな通俗本が今だに世界的古典作品として流布しているのに納得がいかない」と問うと「セルバンテスはそもそも小説家である前に有名な哲学者なのだ。私はドンキホーテよりも先にその哲学に感銘を受けていたので、大衆向けに書かれたドンキホーテも大変おもしろく読めた」といったのである。

手元に辞書がある人はセルバンテスを引いてみよう。ない人はwikiで調べてみるといい。

とりあえず、セルバンテスは波乱万丈な人生を送ってきたとは書かれているが、哲学者であったという説明は一切ないし、もちろん哲学本を出したという記録も一切ないのである。

彼がどこでセルバンテスを哲学者と勘違いしたのは定かではないが、この序文が少なからず関与していると考えていいだろう。

見事にセルバンテスを学問のある博識な名文豪だと思い込んでいたのである。

書き出しは哲学者の格言からはじめよう

「ミゲル・デ・セルバンテス式」とは、簡単にいえば「書き出しは哲学者の格言からはじめよう」ということだ。

そうすることで、作者のことを学問のある博識な名文豪だと読者に思い込ませ、多少つまらないところがあっても、権威の力によって最後まで読ませようというテクニックである。

せこい。確かに せこいかもしれない。しかし、セルバンテスが言っているように実際多くの小説で使われている常套手段だ。

現在でも多くの小説の序文に、格言や、名作の引用が使われている。

あなたが無名の小説であればあるほど「ミゲル・デ・セルバンテス式」を強く薦める。

小説というのは、各あるメディアの中でも特に時間かかるし、楽しむのが面倒くさいメディアだ。だから、誰だって無価値な小説は読みたくないし、できれば自分のプラスになるような価値のあるものを読みたがる。

この価値というのも人それぞれなのだけど、基本的には「自分より頭が悪かったり、センスがない奴の小説は読みたくない」ということだと思ってくれればいい。

今回はわかりやすく、哲学者の格言から入る方法を紹介したけれど、『ミゲル・デ・セルバンテス式』の基本的な考え方というのは400年前にミゲル・デ・セルバンテスがドンキホーテを書いた時のように、あなたも精一杯かっこつけろ、ということである。

最後に

長々と小難しく書いてきてしまったが、小説というものは人を感動させる壮大な嘘の塊だ。

現実生活において正直もので誠実であることは結構だが、小説を書いている時は稀代のペテン師になるくらいの遊び心と色気がほしい。小説にルールなんかない。おもしろいことが全てだ。

また小説だから間違っただけを書いてもいいと肩をはる人がいるけれど、先に言ったように小説は大前提としてフィクションなので、別に間違いだらけだとしてもその間違いにリアリティーがあり読者を惹きつけることができれば、基本的には問題ないのである。

逆に正しいものを書きすぎて問題になるケースすらある。

たとえば、ミステリーのトリックなんかは、実用性があると本当に犯罪に使われてしまう為、実現不可能なトリックしか採用されないのだ。

だから、まあ、肩の力を抜いて自由に書いてくれればいいと思う。ただ自由奔放がすぎると読者に舐められてしまう場合もあるから、せっかくなので「ミゲル・デ・セルバンテス式」を使って執筆活動を楽しんでくれれば幸いである。

電子出版誌「山脈」では、随時ライターや、イラストレーター、編集者などなどを募集しています。無料雑誌なので報酬とかはないですが、電子出版誌に参加すること自体が、あなたの実績になるはずです。

また雑誌に参加することで締切が発生します。

締切に終われながら何かを作るというのはなかなか心地いいものですよ。

実力は問いません。「何ができるかではなくて、何をやるか」です。

興味ある人はお気軽に連絡してください。

山脈では新しい才能の発掘と、手軽にページ数の増強をはかる為、文学賞を主催しています。
我こそはと思う小説家の参加をお待ちしております。

公募要項

賞品：なし

締切：2月14日（バレンタインデー）

発表：3月発刊予定の『山脈Vol.2』にて

- 1.応募原稿は完結しているものに限る
- 2.文字数制限はとくになし。
- 3.ジャンル制限もなし
- 4.タイトルとペンネームを記載してtxt形式で送ること。

送り先：yes_ks@yahoo.co.jpまで

メールのタイトルは「**新脈文芸賞応募作品**」をお願いします。

作品を受けとり次第、確認として3日以内に返信します。

返信がない場合はお手数ですが、もう一度メールしてみてください。

蜂殴打介 【マルチメディア評論家】

知らない間に年を取っていたので、年をとったことを忘れてしまえば永遠に老けないのでは？という真理に到達したので不老不死になりました。ずっと現実逃避をすれば向こうが現実になるよね？もうゴールしてもいいよね？そんな日々、じっと手を見る。

賽川ヒフミ 【ミステリーライター】

SOLWOOD APART代表。大学を中退したことにいまだに後悔を拭えないでいる。東京のバブル期を経験した身にとって、昨今の東京駅前ビル群の林立にはちょっと違和感を抱きます。必要なもの、必要でないもの。きちんとえりわけられる人間と都市が必要なのでは。

八白青香 【フリーライター】

”やつしろせいか”ちゃんです。中身ははげちらかしたおっさんだよ。今回のソーシャルネット記事ですが、実際どこまでがソーシャルって言うていいのかよく分かってないんだよね。いい加減だっけ？

はい、皆さんそーおっしゃる。お後がよろしいようで。

菅原学 【マルチメディアクリエイター】

「電子出版だからできること」ということで新脈文学賞を企画したまではいいけど、調子によって「小説の書き方」なんて物まで安請け合いしたのに後悔した年末。新しいメディアらしい企画ではあるので、1人くらい応募してくれてもいいと思う。

イエス・曖昧 【編集部代表】

初めての電子出版です。この「初めての電子出版」という響きの美しさと、執筆速度の早いライター達に尻を蹴っ飛ばされて、強引に作り上げた感じがします。やるべきことを半分もできなかった惨敗モードではありますが、ノウハウがない一番最初が一番大変だったということにしときたい。まあ次だ。次。

山脈 vol.01

<http://p.booklog.jp/book/41522>

著者：じい出版

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yesks/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41522>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41522>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.